

死の影の下に

映画文学人生論

中村真一郎 (1918-1997)

『死の影の下に』(1947) 「真善美社」
『シオンの娘等』(1948) 「河出書房」
『愛神と死神と』(1950) 「河出書房」
『魂の夜の中を』(1951) 「河出書房」
『長い旅の終り』(1952) 「河出書房」

芸術は永遠だ。しかし人生は瞬間に過ぎない

中村真一郎の長編小説『死の影の下に』五部作は一九三八年の春にはじまり、一九四五年の夏、八月十五日で終わっている。主人公の「私」（名前は城栄）の年齢でいえば、大学の文学部に進学した二十一歳から二十八歳までだ。

「かくて黒き死の運命は彼等を引き行く」というホメロスの詩句を冒頭におき、ギリシアの古典文学を研究する主人公の「私」が父の死、友人の死、伯母の死の回想にふける。幼い頃に亡くなつて、記憶に残っていないはずの母のことも無意識の底からよみあがってくる。

というところ、私小説のようだが、第五部の『長い旅の終わり』では作者がわざわざ登場して、口上を述べているし、別に「城栄の手記」もある。作者と主人公は区別されているのだ。また、軽井沢に別荘をもつブルジョワ階級（貴族、実業家、政治家、芸術家、学者など）とその娘たち（『シオンの娘等』）をめぐる複雑な人間ドラマは絵空事の作り話のようで、作者が経験した事実そのままの描写とは思えない。

解説によれば、二十世紀のフランス文学の伝統を基調とした前衛的な全体小説の試みだという。しかし、城栄のモデルが作者だとすれば、「城栄の手記」は作者が書いた手記であり、城栄の回想は作者の空想により虚構化された回想である。



死の影の下に

映画文学人生論

虚構とはいえ、回想は作者の内面の真実の一部を伝えているはずだ。いわゆる内面心理小説も私小説に含めることができると思えば、『死の影の下に』も私小説だといえないことはない。

「芸術は永遠だ」と「私」は昭和十七年六月十九日に記すが、人生は瞬間に過ぎない。「私は瞬間の人生と永遠の芸術との中で生きている」——作者の認識でもあるとすれば、幸せな男だと思う。

その数日前、「私」は夕方の街の雑沓の中にいて、ラジオがミッドウェイ島強襲のニュースを叫んでいるのを、遙かな潮騒のように聞き流した。

「私」は徴兵検査を受け、丁種不合格を宣言されている。「おい、こんな身体でどうするんだ。文学なんかやるから身体が丈夫にならないんだ、不忠者めが」と検査官に言われたが、不忠者と言われようと、非国民と罵られようと、兵隊にとられないほうが死なないですむ。

人生は瞬間に過ぎないから、いずれは死ななければならぬとしても、当面は「芸術は永遠だ」などと言っていられる。

「私」が芸術や死と結びつけているのは愛だ。「愛なくば、人は死のうちにある」。愛の対象は『シオンの娘等』のうち浮田子爵の娘礼子（薔薇嬢）と広川社長の娘の夏子で、二人とも他の男と結婚するが、結末にどんでん返しがある。

木枯しや星明り踏む二人旅

中村真一郎